



原作 Lusterise

小説 空蟬

挿絵 くまっち&船虫

立ち読み版

守護聖女
prism saber
プリズムセイバー
乙女たちの散華

第五話	第四話	第三話	第二話	第一話
結実	散華	情交	流転	発現

登場人物紹介

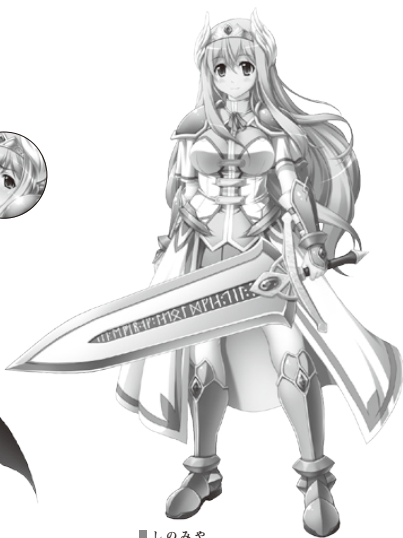
Characters



あまぎ ましろ

天城真白

悪意が込められたイノセントピースによって魔王の戦士フリシアとされてしまったルリナの学園の後輩。



しのみや

篠宮ルリナ

プリズムセイバーの力に目覚めたばかりの少女。快活な性格で正義感が強く、聖女として戦うことを誓う。



かぐらざか みゆ

神楽坂珠優

ルリナとともに聖女の力に目覚めた財団の令嬢。おっとりとして優しい性格だが芯が強く、ともに戦う決意をする。



くぬぎ ちあき

功刀千晶

早くからプリズムセイバーの力に目覚め戦っていた少女。基本能力が高く、何事も一人でやろうとする。

（がつ……我慢っ！　しないで、うう……！）

懸命に言い聞かせ、唇を血がにじむほど嘔まねば耐えきれぬほど、切なく、心が煮きつけられる。

「あふ……うう。……やつ!?　おなかは嫌っ……」

珠優の制服内部で這いずり蠢く触手が、あるじの命に応じて腹部の肉をもむ。ぼっちゃり体型を常々気にかけていた親友は。

「も、許しっ……っや、あああああつ！　ふあ、あうううっ、やアア……っ！」

泣き喚きながら乳首をつねられ、吸われるたび蕩けた喘ぎを頻発する。その際肩が震え、ブラジャーという覆いを失いこぼれた大きすぎる胸肉が、縦にブルブル。巻きついたままの触手ごと揺らぐ。

（ダメ、だよ。そんな顔、したら……）

見たくない。なのに、顔を背ければその隙により酷い目に彼女が見舞われそうで、視線を外すこともできなかつた。

「さて、どっちがイクのが先か？　競争するか」

「っ、ア……イク……？」

聞いたことのない単語に疑問を覚え、また鼻で笑われた。甘苦しいしびれに全身侵されて、頭の中がぼやけている。

——ぢゅぢゅうっ……！

「ひぐつ！ か、嘔んじややつ……！」

歯なんてないはず——なのに確かに鋭い犬歯を突き立てられたらしい刺激が、ズクリと甘く胸の先端を貫いていった。

背後からしつかりと抱き締められた身体は、暴れたくても暴れられない。ただ、悶え、喘ぎ、足掻くことでのみ、抵抗の意思を示すことができた。

(痛いのにっ、嫌……なのにつ、なんでっ……!?)

腰がうずきながら痙攣する。真白と触手の支えがなければ即座に前のめりに崩れ落ちるのである。膝が、壊れたようにカタカタ震えていた。

「それじゃそろそろ、こっちも……♪」

「だっ……」

ダメ——。そう、静止の意思を紡ぐ暇すら与えられず。

くちゅうつ……。

「んやつあああはっ……あやあああつ！」

先ほど、膝が震えるのに合わせて感じた股根の心地から、薄々気づかされてはいた。けれど、決して認めたくはなかった事実を、晒されてしまう。

「あはははははっ！ もう、ショーツもぐつちより。お漏らししたみたいになってるぞ！」

「う、ううつ。い、言わないでよおっ……」

わざと羞恥を煽る言葉を選んで、反応を愉しんでいるのだ。わかっていても、恥ずかし

い——生理的なその感情は、押し殺せるものではない。

「これなら……すぐか？」

ふむ、と考え込む素振りを見せた真白が、口端を歪め邪悪な笑みを差し浮かべる。

「な、に？ あ、アやあつ……掻き混ぜ、ちや、あつ！ つは、やつ、ああつくううう！」

何が、すぐなのか。尋ねることさえ許さないというように、少女の細指がミニスカート奥のもじつく股根を、下着の上からなで擦り始めた。

そつと触られているだけのはず、なのに——胸の奥に巢食う衝撃が乗り移ったみたいに、腰の奥までもがジンジンと、甘く膿んだ衝動に浸ってゆく。

「ふあ！ あつ、あああああ！ やつ、あ、も、お、やあ、だつ、つぶ、ああ、ツアア！」
変になる——。そう連呼しながら、頭上では珠優がおとがいを反らし背を震わせていた。すでに制服はほとんど端切れ状態で、ぬめり気により肌にならずかに張りついているだけ。吊るされた白く透けるような美肌の九割方。顔面以外のほぼすべてを黒い異形に覆われ、犯されている。

唯一剥き出した顔の表情は、ついで見たことがないほどにトロリと湧け、視点がさだまっつていない。見るからに、正常な状態ではない。

親友は真白が言うところの「イク」状態に至りつつあるのだと、知識はなくとも直感的に、否応なく理解させられた。

「ほれほれ。あちらに負けぬように励んでやる」

——ぐちゅ！　くちゅくちゅっ！

幾度か腿をすり寄せたり閉じたりりの攻防を続けた後。とうとう、ショーツの中にまで少女の指の侵攻を許してしまった。下腹部のふくらみをなぞるように滑り降りるなり、腿に垂れ滴った異形の体液をすり込まれる。

「ひ、ぐっ！　ダッ……ふあああああ！」

ダメ、触らないで。叫んでも無駄だと理解していながら、それでも心のどこかで彼女が——真白が元の優しい少女に戻ってくれることを期待する。

けれど、現実は。

「ふふん。やっぱりココもグチョ濡れじゃないか。嘘をついた罰。受けてもらうからな」

——ぎゅ！

「あぐ……！！　い、痛アッ！」

胸を触手に搾られ、左乳首を少女の手につねられた。同時にショーツの中に忍んだ右手で、割れ目の上部に咲く茂みを——つままれ、引っ張られる。

ブチブチと音がしたのは、きつと何本か引き抜かれたからだ。胸先と、それに倍する痛みに晒された股間とが同時に悲鳴を上げ、陰毛が一本引き抜かれるごとに頭の芯に白熱がほとばしる。

（嫌、嫌……！！　この感じっ、はっ、あア……ダメええええええっ！）

最初に乳房を搾られた時と同様。痛みの直後にさすさすと下腹部をなでられ。やんわり

とした愛撫を加えられた。

ただ、それだけで胎の底から甘苦しい衝動が迫り出すのを感知して、歯を噛み締めたり、唇を噛んだり。懸命に押し込めようと試行する。

「無駄無駄無駄あ！ このフリシア様のフィンガーテクをなめるなよ！」

グチグチと股間の縦スジに沿って指を蠢かされた。

「や、だつ、つひ、う……やだ、やだ、やだあつ！」

自分の股が卑猥な音色を奏でていることが信じられず——信じたくなくて。かぶりを振ろうにも、背後の少女と触手による縛めがきつく、叶わない。

拘束されたまま、真白の言うがままになるほかないのだ——。選択肢なき現実に打ちのめされた瞬間。折れた心を嘲笑うように、少女の人差し指が浅く。第一関節辺りまでツプ……と割れ目に埋没する。

——びぐんっ！　びぐ、びぐびぐ！

「~~~~ツツ!!　や、アアアツツ!!」

身体の中に、異物が——他人の指が入ってくる。そんな異常な事態に適応できず、心身とも悲鳴を上げる。わずかに動く腰を振って、腹に力を込め、どうにか挿入を防ごうと抵抗した。

「暴れて、膜が破けても知らんからな」

「……ツツ！」

そんな懸命の反抗に対し、少女が投じたのはたったのひとこと。それだけで、より激しい抵抗は封じられてしまった。

(斗真……ちゃんっ……!)

不意に、脳裏に幼馴染みの少年の顔が浮かぶ。だらしない、十年以上毎日見慣れた彼の姿だった。ずっと。これからも彼の傍にいる。そしていずれば——そう、おぼろげながら願ひ信じていた夢が、今まさに他人の手で引き裂かれようとしている。

「そら、そら」

たつぷりの蜜を絡ませた指で、幾度も割れ目の上をなぞり上げられた。そのたびに真新しい蜜が染み出、即座にまた塗り込められては泡立って、染んでいく。

「腹の中がキュンキュンしてるだろ。素直に言ったら、イカせるのはあっちの女の後にしてやるぞ?」

「——全ッ然ッ、よくなんてないっ!」

本当は、なでられるたびに股の芯まで甘くうずいて、搔きむしりたくて、自分の指でも触りたくてたまらなかった。

でも、珠優を助けもせずに命乞いじみた真似をするなんて、絶対にごめんだ。

「ほ、ほお……言つたな。言いおつたな。あくまで刃向かう気か……!」

直情的な少女は激昂し、目を剥いて指の動きを何倍も激しいものへと切り替えてくる。

にゅぽ! にゅぶによぶによぶ!

「ひっ、あ、あアツ！ んくう……っ、気持ちよく、なんてなっ……んつくうんんっ！」
少女の指が代わる代わる膣口をなでは突き入り、また別の指が掃くように擦り寄っては突き入って。果ては触手までもがショーツの隙間から潜ってきて、膣口付近の肉を食む。真白の指がもたらす快楽と、触手の甘噛みももたらす小さな痛み。

（やはあっ……ま、たビリってきたあ……!）

果てなき肉悦のサイクルに侵されればなしの頭の中で、幾度も白熱が散っては弾け、また弾け散る。

「お、なかの肉、噛まないでっ、お、お股も、おっやッあああッ……くくくッ!」

親友の、切羽詰まった声。大量に艶を含んだ涙声、胸に刺さる。

助けると約束した。これまでずっと、一番の友人でいてくれた彼女との約束を違えたことはなかったのに――。

「さっさとイっっちゃえ、この強情っ張り!」

「ふあ……っ、ツア! 真、白ちゃんっ……!」

汁まみれの指二本で割れ目の上端、深く包皮に覆い隠された箇所をこねくられ、奔り抜けた甘美になんとか舌を噛んで耐えきった。そう、思つて息を吐き、もう一度本来の彼女に「戻ってきて」と願いをかけた、次の瞬間。

ぎゅむうっ――!

「ひ、あ……ッッ! ……ッッ……!」

間髪容れず力づくに、噛みついた触手によって包皮が引つ張られ。剥き出された豆のよ
うな箇所をつねられた。

白熱に白む脳裏に、今度は痛みが、電撃のごとく突き刺さって意識を呼び起こされ。

「気安く名前なんて呼ぶな。……ザコのくせに！」

むきになつた少女の指が、五本全部腔口に張りつき、浅く突き入って、内側から強引に
割れ目を押し開こうとする。

(痛い痛い、イタイ……のに……どうし、て)

腰はガクガクと震え、その中心から甘い甘い蜜を垂れ流しているのだろう。腿を伝う蜜
は、真白の指の動きが激しさを増すのに合わせて増量していた。

「ひぁ! あっ、あひうっ……やあ、だあっ……!」

「や、あ、ああっ、ン……! しびれてっ、へ、変、になるう……!」

量感たつぷりの乳肉を幾重にも巻きついた触手に搾り出されながら、おとがい反らした
珠優も鳴く。吊るされたまま揺らぐ彼女の腰にも、巻きついた黒触手が殺到し、あるじで
ある真白に同調するみたいに、珠優の腿や股肉をこね回しているのだろう。

(ごめん——)

何もしてやれない己をまた恥じて、知らず知らずのうちに腰震わせる。

「そおら。そうまでして馴れ合うんなら、このまま……一緒にイっちゃえ!」

——ぢゅぶっ!!

「ツツ!! ア、はうぐ……うんツツ……!!」

ひと際深く少女の五指が沈み込み、粘膜をこね、爪弾いた。屈辱と恥辱。悔恨と、おぞましいほどの悦楽とに浸されて。

「んひあつ! あはあやああああああ……!!」

珠優ちゃん、真白ちゃん。ごめん、なさい——。

弾ける心の中心に、友人たちへの謝罪の念を秘めたまま。熱く、熱くたぎった情欲のマガマを震えながら前に突き出した腰の奥底より噴出させる——。

——ぶしゃあつ! びぐん! びぐ、びぐぐつ……ぶしゃああああああああつ!

「やらあつ、見ない、でつ、あふあつ! あつくうううんん……!!」

一度堰を切つてあふれ出した分泌液の流れは、いくら腹に力を込めようと止められない。そもそも、その腹自体突き抜ける快感の大波に煽られ波打っていて、ろくに力を込められずたかすら定かでなく。尿液よりも色の薄いそれが何なのかすら知らぬまま、潮を噴くように漏らし続けさせられた。

「ひくつ、つひ、う、うう……つ」

しゃくり上げるような涙声とともに、霞む視界にやはり腰を震わせ悶えている親友の姿が映る。

(み、珠優ちゃん、もつ……)

イカされちゃったんだ——。



ひと際焦れた真白が、震える手で掴んだ肉の槍。その先端が、ようやく。

つぶ……。慎重しやかながらもはつきりと卑しく響く音を伴って、濡れた割れ目に頭部を浅くうずめた。

「んくうう……っ！」

「ひっ……うあああっ！」

堪えがたい衝撃を吐き出すがごとく。ほとんど叫ぶように声を張り上げる。偶然にも、ふたり分の嬌声はぴつたりと重なって、たがいの耳朶を揺さぶる。

(お、大きい、い……!! こんなモノが、わ、私の中に入るっ……の!?)

わずか数センチ食い入れただけで、膣口は拡張感に慄いている。下腹部から伝わる圧迫感で、息が詰まってしまいそうだ。怯えた腰が無意識にずり上がる。

ようやく固めたはずの決意が、腹部の圧迫感に押し出され、霧散してしまいかねない。胸の奥に堆積するすべての感情を閉じ込めるかのごとく、唇を血がにじむほど噛み締め。声押し殺して我慢する。

溜まりに溜まった蜜汁が、開かされた膣口から滴り落ちて、足元へ——斗真がいる地表へと、キラキラと輝き降り注いでいった。

「いっ……!!」

嫌。斗真君、避けて。そう訴えかけようとした唇が、一瞬後。

——ずぢゅぶううううッッ!

「いひあつ！ あつ……くあつああああアア……！」
股間の奥底にまで突き抜けた鋭い痛みにせつつかれるように、引き攣った金切り声を噴き上げていた――。

すでに幾度も使いこなししてきた寄生ペニスの毒々しい幹で、痙攣する腔肉を掻き分けて掘削する。

「ふうあはアツ……！」

感覚まで共有する寄生ペニスの切っ先から、突き入れた順に根元まで響き渡る歓喜の鼓動。腰を押し出すほどにあふれる相手の蜜汁がたつぷりと絡みついてきて、狭く熱い腔洞全体にギチギチと締め上げられる。その瞬間の、思考すべてが真っ白に染まるほど強烈な喜悅の衝動は、幾度経験しようとして決して慣れることがなかった。

ずぢゅんっ……！！

「くあ……！！ いっ、いあつ……！！」

目元に浮いた大粒の涙をこぼすまい、悲鳴を堪えようと懸命に唇を噛んで破瓜の痛みに耐え忍ぶ、神楽坂珠優。プリズムセイバーⅡゲルダの従順な態度を目にして、ますます嗜虐と怒りの感情が渦を巻く。

（下の口で、触手ちんぼキュウキュウ締めつけてきてるくせに……っ！）

寄生ペニスの切っ先がヌルヌルの蜜をまぶされ歓待を受けるたび。牡の脈動は根元まで

伝導し、寄生触手が張った根の一本一本がフリシア自身の膣内を揺さぶり立てる。

牡と牝両方の快楽は相乗効果で幾倍にも膨れ上がり、小さな肢体の隅々にまで浸透していった。

「ふぐ、ううっ……それも全部っ……全部お前のせいだ、あああっ……!!」

——イライラする。イライラする、イライラする……!!

プリズムセイバーIIゲルダとなった彼女の放つ浄化の光をタコ型ギアムの身体越しに浴びてから、ずっと「腹の底まで土足で踏みじられた」かのような感覚が続き、どす黒い怒りが収まらないでいる。強制的に与えられ続ける肉の悦楽が疎ましくも悩ましく、元々鬱積していた憤怒をより高みへと押し上げていく。

自然と、ピストンの速度も上がり、乱暴な抜き差しに終始した。

「うぐ……んんん……っ！ ん……っくううああっ……」

「それで堪えてるつもりかっ?! ヌルヌルの穴でまとわりついてきてるくせにっ……バレバレなんだっ……!! こんなっ、あっああああくっ！ スケベな身体の、分際で……えッ!」
上っ面だけ繕ったウシ乳女の態度と、相反する肉の蠢き。その対極の反応に、なおいつそう嗜虐心と憎悪が駆り立てられてしまう。

「真白、さっ、ああうんっ……お願っ……も、元のあなたをつ取りっ……んぐううっ!」

彼女が偽善を口にするたび、その振動が伝わって、寄生ペニスはギユウギユウと絞り立てられる。寄生ペニスの脈動は根を伝って膣の奥にまで届き、また、切ない衝撃に子宮が

揺さぶられた。

「くふあつ！ あぐ……うう、うるさいっ！ わたしはフリシアだっ。この……！」

——ぢゅぶ！ にゅぢゅぶうううっ！

喘ぎの合間に口うるさく語りかけてくる女の口を黙らせたくて、腰に反動をつけて彼女の胎内を抉ってやる。亀頭から膣洞を伝い子宮まで切々と響く愉悦に半ば蕩かされ溺れながら。ウシ乳女の膣肉の上壁、へその裏側近辺をしつこく擦り上げてやった。

「ふぐっ……ううあつ……あア！ 真白さつ、ひぐああんっ！」

（軽く小突いただけで甘い声で鳴くくせにつ……生意気に講釈垂れるなつ、ウシ乳！ くふっ、うう！ もうすっかりヌルヌルのグチャドロの、くせにつ……くそおとおおっ！）

同様に触手に胎内を犯されている最中なればこそ、相手の身体がすでに陥落間近であることを察知できもした。我が身が感じている快感を、そっくりそのまま置き換えればいいのだから、簡単な話だ。

「ひぐう！ うあつ、あつ、あつ、ひ……い、っ、痛っ、あア……！」

（ギチギチに締めつけておいて痛い、だとオ……この、嘘つき！）

たつぷりの蜜で潤う処女地を、押し広げながら踏み締める。征服欲を満たされた毒色の擬似ペニスが狂喜の脈動を響かせ続ける。連結するフリシア自身の膣内も、負けじと痙攣しながら蜜を吐き——張り巡らされた触手の根に搔き回されて、ひっきりなしの肉快感を注がれて、仕込まれたとおりに腰を振る。

(悔し、いよっ……フリシアは、私はもう誰にも命令されなくていいはずっ、なのに……強く、なつたのにつ……こ、腰っ、あっひ……気持ちよすぎて狂っちゃってるううう！)

群生擬態型のギアムを寄生させられて以降、腹の底、子宮のある辺りが二十四時間絶えず熱を放って、うずきっぱなしの状態だった。うずきは特に女——エナジーの豊富なプリズムセイバーどもを前にした際にひと際高まって、小さな身体を苛んでくる。

「全部っ……ふぁひっ、いつ、ああ！ 全部っ、お前らのせいだっ、あああっ！」

今や寄生ギアムの根に奥底まで埋め尽くされ、小ぶりだった入り口のピラも使い込まれた売春婦のそれのごとく膣口からはみ出ていた。異形の手で穢されてしまった生殖器官からの、胸搔きむしりたくなるほどに痛切な肉の衝動に流されるがまま、壊れた玩具のように腰を振りたくる。

「はぐううっ！ は、激しっ、真白さっあっああアアア！」

(お前たちが現れさえしなければ……！)

きつといつまでも優越に浸っていられた。すべて上手くいくはずだったのに。

目の前で、衣装からこぼれそうな乳房がふたつ。ピストンに合わせ弾むのが異様に腹立たしくてたまらない。

この女が特に癪に障る理由が、ようやく掴めた気がする。うわべを繕う姿に、閉じ込めたはずの「もうひとりの自分」が強く拒絶反応を示すからだ。富裕層に属する家柄。明晰な頭脳。男子の視線を釘づけにする、グラマラスな肢体。恵まれたものをいくつも持つて

いながら、自分の意見を殺して他者を優先してしまう性根だけが、小ぶりな胸の奥底に押し込めた「天城真白」という名の人格と共通する。似て非なる存在なればこそ、よけいに憎悪は鬱積する。

篠宮ルリナに憧れを抱き、そのくせ何ひとつ敵わないと知っていた。負け犬気質が染みついてしまっていた「天城真白」が、「目の前の女を消して！」そう、近親憎悪の焰ほのおに焼かれながら訴えかけてくる。

『むね、いたいの？　くるしい？　イジワルされたんなら……やりかえしちゃおうよ』

胸の奥で真白と一緒に眠るイノセントピース。そこから届く誘惑の言葉が、いつも以上に甘美な響きとなって心揺さぶった。

（うく……！　そう、だ。嫌なことするヤツは……みんなみんな壊しちゃえばいい！）

そうすることができただけの力が今の自分にはある。もう、言いたいことも口にできないように使われるだけだった真白ではないのだ。「無垢なるもの」ロンドフリック。そう名乗った幼女の声を伝える宝石——イノセントピースを手に入れたあの日から、自分は使役される側でなく、君臨する側に回った。

敵対する連中を蹂躪し、颯り、辱め、そして輝かしさに満ち満ちた彼女らの未来を——生命力を吸い尽し摘み取ることだって、可能なのだ。

「見苦しいウシ乳も、スケベな股も……使い物にならなくなるくらい決ってやるっ……！」

——ぐぶぢゅうっ！　ごりゅっ、ぐぶぐりゅゅうっ！

擬態ベニスの亀頭を形成する数多の触手に命じる。奥の奥まで到達した状態で散開して、蜜まみれの腔肉の方々へと囁みついて、もつともつと鳴かせてやれ——！

「ひあつ！ ああぐ……っ!? いっ、痛ッ、あつああんぐっらんんうう——ッッ！」

胎内からの圧力に晒され、今度こそウシ乳女の瞳から大粒の涙が押し出された。その、叫びとも嬌声ともつかぬ声と煩悶の表情を見つめながら。

——ぐぢゅ……づぼぼっ！ ぐぼっ、ぼぢゅぶうううっ！

突くほどに過敏に応じてくれる彼女の腔穴を無数に割れた毒色の切っ先で堪能する。

腰を押し出せば、腔内へと潜ったそばから毒色の砲身にぬかるんだ肉ヒダが絡みつく。抑えがたい肉の衝動を誘発する悦ばしい衝撃に身をゆだね腰を回せば、ウシ乳女の腰も合わせるように妖しく、淫らにくねり躍った。

「ふぐっ、うっ……ううう！ このっ、このこのこのおおっ！」

いやらしい。ウシ乳女が……！ 人に説教垂れる前に、自分の淫乱な身体をどうにかしたらどうなんだ！ 変態女変態女変態女——！

分散した亀頭で交互に、連続して相手の腔肉を抉るたび。寄生ギアムの張った根によって同じだけの圧力を浴びせかけられる自身の子宮口から込み上げる、止め処ない衝動に耽溺する。麻薬に等しい苛烈すぎる肉欲衝動を囁み砕く勢いで食い締めた、その唇の奥で呪詛のごとく敵を罵倒する。

結合部より滴る汁を追って地表を見下ろせば、とうとう群がる黒触手に搦め捕られ、プ

リズムセイバーの杖ごと地に縫いつけられた男の姿が目にとまった。

「ああ、つ……ほおら！ 貴様の大好きな男が見ておるぞっ！ ぐちゅぐちゅ鳴ってる貴様の穴を、いやらしい目で、つあ！ にくふううつ……ほらっほらほらああっ！」

——ぼぢゅんっ！ ぱぶっぢゅぼぼふうううっ！

「い、言わないでっふうああっ！ やっ！ あっああうううっ！」

ウシ乳女は現実を認めたくないとはばかりに身体を折り曲げ、視線が下に行かぬよう努めていたけれど、身体のほうはただひたすらに正直な反応を見せている。

「は、ははっ、はア……ッこの……見られて悦ぶ淫乱がっ！」

好いた男の視線を意識させた途端、彼女の膻ヒダはいっその激しさで毒色の砲身へとすがりつき、大量にあふれた蜜液を刷毛の要領で塗りつけてくる。それが、異形ペニスの歓喜と昂揚を煽り、より痛切なピストンを誘発するとして悟っていないながら——潤滑油となる蜜液を漏らし続ける。聖女に選ばれたからといっても、こんなもの。偉ぶっていても、しよせんは女だ。突けば上下の口から嬉し涙と甘い音色をこぼすだけの、肉の塊。

「その程度のっ……くふっ、うう……あはははははははっ！」

きつと真白が懂れたルリナだつて、目の前の女同様。ぶち込んで突けば喘ぎだす。女なんて誰も彼も一緒だ。そう思うと無性におかしくつて、底抜けに腹立たしい。後から後から湧き出し続ける苛立ちは、全身に循環する肉欲を際限なく増長させた。

——ぢゅぼっ！ ぐぼぢゅぼっ！ ぢゅぬっ、ぬぶぶ……ぢゅぶ、ぢゅばあんっ！

声の響きが腰に伝わって、歡喜に悶えながら相手突き上げる。

「んぐっ！ んんむううう……っ！」

唇噛み締めた敵の、堪えきれない喘ぎに合わせ派手に揺れる、ふたつの豊乳が目障りで。長衣に指を引っかけて引き下げ、元から半分露わとなっていた乳房を完全露出させる。

「いやっ……！」

「ほおら、下でアイツが見ているぞ……隠すな！」

——ぎゅむうっ！

身をよじろうとした獲物を躡けるべく、加減なしで右の乳首をつねってやった。

「いつ、痛アアッ!! ひっああア……ッ！ んくうううううっ！」

被害者面で涙声を漏らす上の口よりも、下の口のほうがやっぱりずっと正直だ。男の存在をちらつかせるたび、奥を突き上げるたびに引き締まる肉の穴。そこを好き放題に抉り、掘削しては掻き混ぜ、蹂躪する悦びに浸かりゆく。

「ふうあっ……!! つく、なにが『痛い』だっ……こんな、あ、ああくう！ ギユウギユウ締めつけてっ、腹の中ドロドロにしてくせにっ……！」

延々肉棒を締めつけてくる膣肉の蠕動ぶりが、快楽を貪っている何よりの証拠じゃないか——。搾り取るみたいに活発な蠢きに煽られ、毒色ペニスが幾度となく脈打つ。もうじきだ。もうすぐ雪崩のとき快楽が——吐精に伴う苛烈な衝撃が、腰の芯底に押し寄せる。

「そ、そんな、あっ！ ああくああああっ！ うそっ、おっ、あ、ああひい……ッ！」

七つに分離した触手ペニスを鉤のように用い、ネットリと火照る敵の膣ヒダをめちやくちやに掻き混ぜてやる。その都度せり上がる射精衝動に腰から背筋、脳天までも耽溺し。

「くふ、くふふふふっ！　すぐにつ、ぶちまけてやるぞ……あの男の前でっ！　ふうっ、うん、ふううっ！　ああ……ああアア……！」

もつと無様に泣かせてやる。はしたなく卑しい姿、初めての膣内射精でアクメする様を好きな男の前で晒して、絶望するがいい。泣いて許しを請うても、絶対に手加減してやるもんか！

ぶらんっ——。

煮えたぎった激情と情欲の命じるがまま、新たに召還したヒトデ型のギアム。手乗りサイズのそれを、力任せに左右のウシ乳へ、ふたつ連続で叩きつける。

——ぶぢゅっ！　ぶぢゅうううっ！

「あひッ!?　む、胸はもうやああっ……んくっ、ア！　っひ、ああああ〜っ！」

餅肌張りつくヒトデギアムは、まるで星形のニプレスの装いでウシ乳の乳首を包み、獲物を囓る悦びに打ち震えていた。今まさに内に生え揃った棘で勃起乳首を噛み噛み。刺激しては貪欲に吸い立てている。形がひしゃげるほど絞られ、吸引された両乳房からはうずくような痛みが流入しているに違いない。

——ずぢゅぶ……ッッ！

眉を歪め胸揺らす姿に確信をして、より激しく触手ペニスで膣肉を掻き回してやった。

「んひひひひひひひひ！」

痛覚の刺激により過敏となった感度は、快感にもそのまま適用されてしまう。予想どおりあらゆる嬌声を噴き漏らした女の膣肉が、無体をされてなお健気に肉棒にしがみついてくるのを感じて、言い知れぬ興奮に身を焼かれ――。

「このままっ……ふ、ふふはははっ。出してやるっ……そんなに欲しいならギアムの種をびつちりと植えてやるわっ！ 注いでやるからなあっ！」

いよいよ切迫した射精の予兆に腰が揺さぶられ、連結したフリシア自身の子宮もキュンキュンとうずきっぱなし。掻き立てられるようにしての、宣言だった。

「ひっ……ああああああっ！」

孕ませ宣告を受けて、ウシ乳の表情が恐怖に引き攣る。それも、ほんの一瞬のこと。

——ぐぼっ！ ぼぢゅぶぶぶ！ ぶぼんっぐぼぶぢゅぶぶおっ！

「か、は……っ、んっ！ んんんっ！ やあっひひひひひひ！ おっ、音おっ！ ぐぢゅぐぢゅっ、やっあああひひひひひひっ！」

七つの亀頭に挟まれた膣ヒダが、こぞってネットネットと蜜まみれの身体をすがりつかせて蠕動をエスカレートさせる。貫かれる女の表情は瞬く間に恐怖から肉欲への陶醉に移り変わり、だらしなく垂れたよだれが糸を引いて宙に舞う。

「もっ掻き混ぜて欲しいかっ!! うぐ……っ、ふ、ふふっ！ チュウチュウ吸いついて……っ、そんなに種が欲しいか！」



チュウチュウと吸い立てられたかと思えば嘔みつかれ、緩急の利いた責めに翻弄されるがまま。疼痛めいた甘苦しさに両胸も溺れてゆく。

——ぶぼおっ！ ぼぢゅ！ ごぼぢゅぶぶうっ！

抜き差しの幅を大きくされた肛門は、その都度めぐり上がり、痙攣と収縮を繰り返した。「あはは！ 喉が締めつけてくるよおおっ！」

乱暴なピストンの衝撃を少しでも緩めようと大量の唾液を分泌した喉が、侵入者にまぶそうとしてしがみつきの。凶らずも歓待しては、また激しい脈動に犯されて痙攣する。

「認めてしまえ。そしてその浅ましき情欲を、我が王の供物くもつとせよ」

（違う。違う、違う違うッ——！）

敵の言葉を、振れぬ首を揺すって頑迷に拒絶する。

すべては肉体の生理的な反応によるもので、決して自ら情欲を貪っているわけではない。そう信じることで、ぎりぎり理性が保っていた。

「んぶっ！ んむううっ！ ひぐっ、ふうンンン！」

けれど力任せに叩かれた子宮が歓喜に蕩けながら蜜を噴くたび、頭の隅で理解させられる。自分の身体はとつくに化け物と成り果てた幼馴染みとの交合に順応し、歓喜に咽んでしまっているのだ——と。

「ギアムなどに構わず戦えばよかったものを。まったく理解に苦しむ生物だよ、お前たちは。だが、そのおかげで魔王に送るエナジーを確保できるのだ」

感謝せねばな、と青い瞳の男がうそぶいた。

(誰かを犠牲にしちゃったら意味ないもの。だから。だつ、ああ、だからなのおツツ!)
だから、しつこく子宮口をこね潰されても屈したりしない。腰から下の感覚をなくすほど悦楽に溺れていても、戦う理由さえ忘れなければ。斗真を満足させれば、きつと活路が見えてくるはずなのだ。

——ごぶんツッ! ごぶつ! ごぶづんつ! ぬぶつ……にゅぶぢゅぶぶうううツツ!
そんな、すがる想いを否定するように。

「んぐぶううう! んつ! んんんん——ツツ!!」

突き崩された子宮が、溜め込んだ肉悦を蜜とともに吐きこぼして、口を開いてしまう。

(ダメ、ダメダメええ! そこに、それ以上奥に入られたら……直接つ、ズコズコされたりしたらあぁっ!)

女として一番大事な器官を汚される恐怖に慄く心が本能によるものであるなら。

相反して期待に突き動かされた子宮が蕩けて震え、また大量の蜜を吐く。それもまた、生物としての生殖本能に従った肉体の、在るがままの姿だった。

——にゅぶぢゅつ! ぢゅびゅにゅぢゅううつ!

「んいぎうう……しゅつ!」

収縮する産道の蠢きと、ぬかるむ蜜の滑りとにいざなわれて、ズブリ。勢いよく舌の先端が子宮口に食い込んだ瞬間。

(ひぐう！ ま、たっイクううっ！ 斗真ちゃんの前でっイクふうううううううううっ！)
もう幾度目とも知れぬ絶頂に押し上げられ、巨大赤舌との結合部から蜜汁を、膀胱からは黄色い尿の噴水をほとばしらせた。意識がちぎれ飛んでは押し寄せる絶頂の大波、その甘美なる衝動によって揺り起こされ、また苛烈な肉悦楽に襲われ、弾け散る。

ボコ……ボコッ、ボコンッ！

「んぐううッッ！ ンッ！ ンンンぐうッ——!!」

果てつばなしの子宮を刺し貫く異形の舌先が、小刻みに震えブリュブリュと、何か得体の知れぬ代物を大量に射出した。

(な、に……？ わ、たしっ、なにされてっ……んふアアアッ！ ま、またあアアッ！)
ボコンッ……！！

存外弾力性に富んだそれら——粘性の高い液に包まれた卵状の、小指の先ほどの小粒の群れは、子宮内部に飛び込むなり縦横無尽に跳ね回り。

圧力を受けた内壁がまた抑えがたい肉のうずきを植えつけられて引き攀れる。

卵を包む粘液は跳ねるたび糸引いて、粘膜に卵形の塊を付着させる糊のりの役目を果たした。「ギアムは、元となった者の欲が深ければ深いほど、大量に種を産む」

「——ッッ！」

関係のない話題を今わざわざ会話に出すはずもない。つまりメルコールの言う「種」こそが、今しがた胎内に射出された異物の正体ということだ。

証拠に、男と足元のギアムはタイミングを揃えたみたいにイヤらしい笑みを差し浮かべて、狼狽する供物の瞳を見据えている。

「その種は、ギアムの精を浴びることで孵化をする」

(ひっ……!)

メルコールの暴露に、背筋が凍る。また精を浴びていないのだからありえるはずがないのに、子宮内一杯に注がれた種——大量の卵が一斉に身じろいだ気がして、抗えぬ恐怖と悪寒が心身の萎縮を呼ぶ。

怖い。嫌だ。使命を果たさなければ。このままでは斗真を助けて、目の前の男を倒すことができなくなる。様々な感情に吞まれた心は現実逃避を望み、悲鳴を上げながら軋み、押し潰れかけていた。

「んぐふっ！ んむうらん……っ！」

なのに喉奥をぶたれ、指や腋、へそまでしゃぶられ、乳を絞られて、肉体は歓喜の波に埋没する。

(締めちやダメ、なのにつ、いつ、いいいつ！ ふくあつ、あああああつ……!)

びゅっ……ぷちゅびゅっ……!)

止め処なくあふれる蜜が、内腿を伝い落ちて。

——づちゆるるるっ！ ずるっ、ぬずちゅっ！

まるで砂糖水にたかるアリみたいだ。蜜をたどって群がってきた大小様々な触手の群れ

を内腿に感じながら、そんな風に考える。

「——聖女に選ばれし戦士の胎は、さぞかし活きのよい悪夢ギアムを生んでくれるのだろうか」

(嫌あああああッ!!)

ギッチリ拘束された四肢を暴れ回らせようにも、すでに込める力そのものがろくに残っていない。

赤舌に籠絡された子宮は、ペロペロとなめ上げられるたびに嬉しげに扉を開放し、穿たれた卵を一身に受け止めて、咽び泣く。

「ふぐううんっ！ んぐむううん——ッ！」

目も眩むほどの肉の悦びが、胎内で幾度となく反響しては意識を引きちぎり、無様なうめき声ばかり塞がれた唇からこぼさせた。

——びゅっ！ びゅっびゅぶぶ……っ！

ぬぢゅ……にゅぢゅるるうううっ！

腔口からあふれた蜜汁をたどった数多の触手がとうとう肉の割れ目に殺到する。まず尖兵役の細い触手群が食んだ恥毛ごと陰唇を引っ張り、生まれたごくごくわずかな隙間へと、棘のついたのやいボイボのもの。

(やめっ——)

ありとあらゆる形状の肉棒が鎌首を突きつけて、声にならない懇願と、腹部になけなしの力を込めた小さな小さな抵抗を踏みこむ。

——ごりゅッッ！ ぐぶつぬずぶぶふうつ！

「んぐうっ！ いぎっ……んぐんん……!!」

裂ける——。次々強引に頭部を割り入らせる異形の凶行に、瞬間的にそう感じたけれど。

——ぬ……ぢゆるうううう！ ずぶぢゆうっ！

(ゆ、緩んじややつ、あ……あふうああああ!!)

激しく出し入れされた尻穴がめくれながら摩擦刺激と熱に溺れ、膣口とともにヒクついて。ぬかるみにも乗じて、棘つきとイボイボ。二本の触手が競って膣奥へと潜り込む。

——ずぬぶっ！ ぐぢゆぶぢゆうううううっ！

「ひっ……んむぐうううウウウ……ッ！」

一気に産道を駆け上る新たな侵入者と、先行する赤舌とが擦れ、せめぎ合いながら揃って脈動した。

(こ、んなっ……こんな、いつべんにズボズボされたら、あつああつ……ガバガバになっちゃうっ！ 元に戻らなくなっちゃうううううッッ！)

揺さぶられながらこじ開けられ、掘削される膣壁は、もはや抵抗のすべすら持たず。蜜にまみれた粘膜を異物にすがりつかせたところで、侵入者どもをただ悦ばせ、よけいに勢いを増させるばかりだった。

ポコッ、ポコポコンッ！

「んぐっ、うううっ！」

粘性の膜に覆われた卵は、今や子宮内部を八割方ほど埋め尽くし、隙間なく内粘膜に寄生してはプルプル。各々が命の芽吹きを伝えるように振動して、内側から肉体の籠絡に加担する。

(おな、かつ、うぐっ……張り詰めて、く、苦しいのに、なのにいっ……!)

ポコポコと、へその奥付近にまで産道を登った異物たちが、棘だらけの胴や肉厚の頭部、硬い殻に覆われた傘を好き放題にぶつけてくる、そのたび。

異形の乱行を反映して。肉付きのいい腹部は歪に膨れ、引き攣れる。股下からは、身体が悦んでいる証拠が——蜜汁が大量にただ漏れていた。

「うあ……っは、あはははははははははっ！ コイツの喉がキュウキュウっ……プリシアのちんちんに吸いついてくるううう！」

——ぐぼ！ ぼちゅ！ にゅちぶ！ ぽぶぶっ！

「んぶうっ！ おご……んぐっんんぶ……ッ！」

真白の激しいピストンをモロに浴びて、喉奥も引き攣れながら収縮し、意図せぬ愛撫を施してしまう。腰の芯にまで響き渡るそのひと突きごと。脳幹が揺さぶられて白目剥く。

——づぬぶ……ぼぢゅんッ！ づぬぼオオッ！

(あッひィィィッ！ おひりっほじられっ……ど、どんどんっ奥にィィィッ！)

尻穴を占拠する異物どもが大腸を踏破して小腸にまで侵攻し、食道へと続く道筋を探って蠕動した。その苛烈な律動に淡く色づいた肛門はわななきながら応じ、薄茶色ににじむ

蜜をこぼしっぱなし。

——づちゅんっ！ ぶちゅ、ちゅぶふううっ！

ついに口内から突き入る真白の毒色ペニスと、腸から責めた触手群が合流し、勢い余つて接着。体内粘膜も交えて絡まり、汁気とうねりと情欲にまみれた浅ましいキスをした。

(ひぐっ！ あ、ああぐッ！ グチュグチュ鳴って、る……私の中つ、全部掻き混ぜられてえええっ！)

なのに、どうしてこんなにも。

意識が霞んで、他に何も考えられなくなるくらい気持ちいいの——？

ボコボコと卵を孕まされ続ける子宮が、異形同士のキスのたびに引き攀れて、まるで我が子を守ろうとするかのように子宮内部に蜜の雨を注ぐ。

——ず、りゅ！ ちゅぶちゅふううううッ！

「んぐうううう——！」

滴りあふれた蜜をたどって産道を登る種つけ系の連中が、ついに子宮口へと到達し、グリグリと外側からも揺さぶりを加えてくれた。

ギチギチと絞られ熱孕む胸奥が、期待——そうとしか言いようのない感情に支配され高鳴っている。

(だ、出しちゃダメっ……卵に白いのっ、かけちゃダメなおおっ！)

怯え、恐れて、嫌悪する。そんな感情を裏切って、赤舌にしゃぶられた子宮口は従順に

唇を開き。内でみっちり息づく「我が子」らを、見せびらかすように披露する。

「んあぎッ……!!」

悲鳴を上げられない唇が、口内を埋める毒色ペニスに菌を立てた。

「あぐあ! うああ! 出るっ……またっせえし出るうっ、んおっおおううう!!」

真白が腹を立てながら嘶き、腰を振る。

ぼびゅぶうううっ! びよぶびゅっ! びゅぐ! どぶっどぶびゆるるるるるるう!

「えぐっ! ううっ! んご……ぷっ! んぶぐううううっ!!」

胃袋へじかに注がれる白濁汁が、毒色ペニス自身のピストンに合わせて氣道を遡り、鼻からあふれて噴出した。

ごぶっ……びゅぐびゆるぶぐぐっ!

(あつ、あふアアア! お尻っ、中、奥もおつ、焼、け、んひやああアア……!)

同時に、尻から突き入った触手群も茹るほどの粘性汁を噴き上げる。

——ぐぼオツッ! ぼぢゅぐ、ぶぶぶうっ……!

子宮内を席卷した卵を見定めて、押し入った種つけ係たちが躍動した。

(来ないでっ、もうこれ以上っ……入ってこないでええええええっ!)

大事な幼馴染み、親友のため。正義のため。他の誰かが泣かずに済むように。

これまでギリギリの部分で支えてくれたありとあらゆる想いが、女の身体の最も弱い場所を蹂躪されるたび、ドロドロに溶け崩れて、失われる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

11年目も激しさそのまま、お楽しみもそのままで!

EDDREAMIMAG

さらさら
お楽しみ
お楽しみ
お楽しみ

偶数月
17日発売

Vol.61
2011年12月

ニ次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

大興奮! 魔法使いのHコミック!

コミックアンリアル

奇数月
12日発売

Hisasi

コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

Prism
コミックプリズム

18
420円

あつあつボディ
いっぱい聞かせて

2・6・10月
下旬発売

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

メガミクライシス

奇数月
中旬発売

雷のライオン

メガミクライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

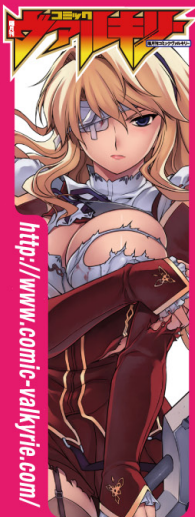
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!